

## カリフォルニア大学マーセドでの在外研究

工学部併任講師 林 長 軍

2011年8月から1年間、本学の在外研究員として米国カリフォルニア大学マーセド校(University of California Merced、通称UCマーセド)で研究生生活を送りました。

### マーセド(Merced)

マーセドはカリフォルニア州中部大平原中(砂漠)の小さい町です。1889年に議会-政府の決定によって都市になりました。近くで流れているマルセド川の名をとってマーセド市と名づけられました。有名なヨセミテ自然国立公園(写真1)に最も近い都市ですから、ヨセミテの玄関口とも言えます。人口は7万人強です。そのうちヒスパニック系またはラテン系(主なメキシコ系)は約41%、アジア系(ミャオ族)は約12%に占めています。これらの人々は英語を殆ど使わないです。ここで何十年生活しても英語を話せない人は多いです。同人種集団で生活しているため、何の不便もないようです。メキシコ系はスペイン語を使っています。ミャオ族はミャオの言葉やカンボジア、タイおよびベトナム語を混ぜて話しています。ミャオの人達は昔カンボジア、タイおよびベトナムの三角地帯で生活していましたが、ベトナム戦争のとき、アメリカ軍を支援していました。終戦でアメリカ政府はこの人達がベトナムに処罰されることを心配して村ごとをマーセドに移住させました。この人達は殆ど農業に従事していて、新種の野菜や農作物を持ってきて、地域の農業の発展に大いに貢献しています。

マーセドは広大な農地を持つ農業都市です。葡萄、ミカンおよびサクランボなどの果物とトウモロコシなどの農作物を産出しています。工業は殆どないため、経済の発展は遅れています。失業率は全米で一番、約20%です。収入も低く、貧困層割合は20~30%にのぼり、全米でも高水準です。貧困地域とも言え

ますが、人情性が溢れているところです。年間市民行事が多く、市民は幸せに生活しています。写真2はダウントウンでの市民パレードです。

気候に関しては砂漠地域のため、年中乾燥しています。雨量は少なく、私が滞在の一年間、雨らしい雨は2、3回しかなかったのです。夏の最高気温は45に達したこともあります。直射日光が顔に当たって、火傷する感じもします。しかし、空気が乾燥しているため、木影に入ったら、そこまでの暑さは感じられません。また、一日中の温度差が大きいです。夜になってからは涼しくなり、眠れない日は殆どなかったです。冬の最低気温は0前後、寒くないです。

### カリフォルニア大学およびマーセド校

カリフォルニア大学は州立で、現在カリフォルニア州全土で10の分校で、在学者数22万人以上と職員8万以上をもつ世界でとても有名な大学です。世界的にも有名な研究を重視しているため、ノーベル賞を受賞されている研究者は多いです。特にパークレー校は受賞者が多いため、大学から受賞者に大学専用駐車場(名前付・露天)以外、何も優遇されていないそうです。

UCマーセド校(写真3、4)はカリフォルニア大学の10番目の新しい分校です。州政府はマーセド地域の発展を促進するために、前世紀九十年代マーセドで研究中心の分校を立てるようになりました。2005年一部の完成で開校されました。UCマーセドはマーセド市の東北郊外にあり、広大なキャンパスを持っています。その土地は地主から州政府に寄付されたものです。現在、工学部、自然科学部および人文科学と芸術の三つの学部を持っています。学生数は開校時の875名から現在の5千名以上になっています。これからも年々拡大していき、2025年に3万

人を超すカリフォルニア大学の最大分校になる予定です。また、工学部においてバイオ、計算機、環境、材料科学および機械工学の5つの学科に分かれています。助教以上の教員は全員自分の研究室を持って、PhD課程の院生を指導しています。私が所在した機械工学科で教員9人は二十数名のPhD院生を指導しています。それらの院生は先生から月\$1500~\$2000をもらっています。従って、大学の教員は経営者とも言え、院生から教員を「先生」より「ボス」と呼んでいます。教員の給与は皆それぞれ異なり、9ヶ月分の給与しか大学からもらいませんが、残りの3ヶ月は自分の研究費（外部から費用も含め）とかから賄うそうです。平均的に大学教員の給与は会社員より低いそうですが、仕事寿命は会社員より随分長く、80歳でも働けるそうです。一方、9ヶ月給与制度のため教員は長く学内にいなくても、問題はありせん。年間半年学内にいない教員も珍しくありません。この制度によって教員の研究時間が多く、研究活動範囲も広くなり、研究を促進しています。また、教員はすべて終身制ではないです。UCマーセドの教員は7年間勤務すると終身教員になれます。従って、非終身の教授がいれば、終身の助教もいます。

## 研究生活

私は機械工学のSun教授の客研究者として機械工学科二十数名のPhD学生がいる大きな部屋で一年間研究生活を送りました。Sun先生は機械振動制御分野で有名な学者です。機械振動とは、例えば自動車の振動が大きくなると、無駄なエネルギーを消耗し、振動騒音も大きくなり、操縦者の疲労にもつながります。その振動抑制は機械工学の課題になるし、環境問題の課題にもなります。私は振動問題に取り込んで、機械機構の最適設計の立場からその振動を抑えようと試みました。一年間Sun先生と検討しながら、その研究を進めてきました。Sun先生は国際的な研究者ですから、年間半年以上ヨーロッパやアジア国々をまわり、研究活動をされています。とても忙しいのに、時間を作って私の研究にアドバイスをくださいました。心より感謝しています。

自分の研究だけでなく、PhD学生の研究ゼミや外来研究者の講演などに参加させてもらいました。

ゼミ中、学生が教員に対して恐れもなく、時には激しく自分の意見を主張する姿を見て、このやり方は独特性のある研究者の養成によいではないかと思いました。また、毎日その二十数名のPhD学生と同空間で研究について検討したり、学校や社会の話題などをしたりして、自分も二十数年前の学生時代に戻った気分になって、とても懐かしく思いました。

## 雑談

**自転車の有効利用** 写真5はUCマーセドの通学バスおよびサンフランシスコへの電車です。この写真に示すように、カリフォルニア州ではバスや電車で乗客の自転車を運べます。勿論、自転車は無料です。乗客にとって、とても便利がよく、環境やエネルギーにもよいことです。

**自由な服装** カリフォルニア州の人々は自由な格好が好きです。スーツの姿は殆ど見かけません。UCマーセドについたばかりのことですが、国際交流の関係者と外国人研究者の懇親会の一つ、「お茶の会」がありました。「正式な服装を着て参加してください」という知らせを読んで、私は何も考えずに、スーツの格好で参加しました。会場に入ったら、数十人の中で私だけスーツを着ていました。ちょっと困りました。後で正式な服装は何でしょうかと尋ねますと、「サンダルや半ズボンじゃなかったら正式です」と言われました。

**救急車の有料** カリフォルニアで救急車の利用は有料で、タクシーより随分高いと言われました。救急車の利用者は少ないそうです。医療福祉の面では日本の方が随分優れています。

**総学長講演の厳重警備** 2011年10月カリフォルニア大学の総学長はUCマーセドで講演されました。その講演会場で数多くの警察官（写真5）は会場の回りのほかに、ビルの屋根で襲撃銃までも設置して厳重な警備をしていました。日本では見たことがない光景です。

**貧富の差別ではない??** カリフォルニアで車を運転したとき、時々綺麗な道路から突然凸凹の道路に入ります。どういうことかなと現地の人に尋ねたところ、綺麗な道路のほうは富裕地域とのことです。これは差別ではないかと尋ねたら、富裕地域の人々は税金を多めに納めているので、当然生活面で優遇さ

れますといわれました。富裕地域の公園や道路などの環境はすべて綺麗に整備しています。極端な例では、同一道路でも、夜富裕地域側の路灯がとても明るいのにに対して、貧乏地域側は真っ暗です。日本で考えられないでしょう。

## 最後に

一年間の米国生活で楽しいこと、困ったこともありましたが、私の人生にとって貴重な体験でした。この場を借りて、この機会を下さった本学関係者の皆様、国内外でサポートしてくださった皆様に心よりお礼を申し上げます。



写真1 ヨセミテ国立自然公園



写真2 マーセド市民パレード



写真3 正門と大学の周辺



写真4 工学部と図書館ビル



写真5 通学バスとサンフランシスコへの電車



写真6 総学長講演の厳重警備

## フィンランドの古都トゥルクでの生活

法学部准教授 畑 中 久 彌

街の真ん中に建つ赤レンガの教会。高い建物がなく開放感のある街並み。その上に広がる澄んだ青空。街を行き交ういろんな髪の色の人たち。

今でもふと、家のすぐ外にそんな風景があるような、研究室のドアの向こうにはあの大学の廊下があるような、そんな錯覚にとらわれます。

2011年9月からはじまったトゥルクでの生活。それは人にも環境にも恵まれた、素晴らしい1年となりました。

### 落ち着いたある街トゥルク

トゥルク Turku はフィンランド南西に位置する人口17万人の街です。かつての首都であり、日本でいえば京都にあたるような都市です。

市街地を端から端まで歩いてあまり時間はかかりません。自転車でも20分も走れば深い森が目の前に広がってきます。

リスはもちろん、郊外では野ウサギもキツネも出ます。キジもトコトコ歩いていました。トゥルクは喧噪とは無縁の、とても落ち着いたある街でした。

### フィンランドの言葉

フィンランドの公用語はフィンランド語とスウェーデン語です。一部の地域ではサーミ語も公用語になるようです。

私はフィンランドの法律を研究しにいきましたから、事前に頑張っってフィンランド語を勉強していききました。が、なかなかフィンランド語で会話するのは難しく、片言にも届かない程度でした。

それを救ってくれたのが英語でした。私の英語力はトホホなレベルなのですが、先方の英語力はとても高く、ほとんどの人が英語を流暢に話していました。大学でもスーパーでも銀行でも英語で対応してもらったことが多かったです。

もっとも、相手に時間がありそうな時は、頑張っってフィンランド語会話に挑戦しました。すると、多くのフィンランド人がにこっと笑って話につき合ってくれるのです。

フィンランド語はとても難しく、世界的にみて話者が非常に少ないにもかかわらず、果敢にフィンランド語を話そうとしている

そんな好感を持って頂けたのかもしれない。

### トゥルク大学のこと

#### (1) 学生生活

トゥルク大学法学部。学生数は1学年120名くらい。在学年数を教授に伺ってみると、「一応、5年が標準だけど、オーバーすることもよくありますね」とのこと。留年が一大事という受け止め方は(私の印象ですが)ないようでした。

フィンランドでは子どもの自立が早く、政府もそれを奨励しているそうです。たとえば家賃補助があります。学費も無料です。14、15歳で一人暮らしをはじめたという人もいました。ですから大学生ともなれば基本的には自活。働きながら大学に通う人が多く、それで在学期間が長くなるようです。

それから、定期試験にも驚くことがありました。受験のチャンスが2回あるのです。風邪で欠席とかに限らず、1回目不合格だったからとか、(私が履修したフィンランド語クラスでは)1回目は日程の都合がつかなかったからとか、あるいは結果に自信がなかったからとか、そういう理由でOKでした。

学生と教員の関係も非常にフラットでした。ファーストネームで呼び合い、地位が感情面での上下関係に及ぶことはないようでした。人間関係のあり方と人の呼称との間には直接の関係はありませんが、フィンランド人の研究者もたしかに人間関係はフラットだと言っていました。



トゥルク大学のモットー  
「自由な市民からの自由な学問への贈り物」

## (2) 研究生活

パソコン付きの個室、大学のメールアドレス、図書館の利用、コピーやボールペン等、大学のスタッフと同じ条件で使わせてもらえました。教員も事務の人達も温かく親切で、研究に加えて日々の生活のことにも配慮して頂くなど、恵まれた環境に感謝の言葉がありませんでした。

研究生活は、主にフィンランド語の法律文献を読み、それをもとに指導教授とディスカッションするというものでした。「いつでも好きな時に来て下さい。どんな質問でも歓迎します」という言葉に甘えて、文法的な問題や法律の原文の所まで聞いてしまったのですが、いつも丁寧に答えて頂き、フィンランドと日本の法の相違に議論が発展していきました。また、12月頃になって何をどう研究していけばいいのか分からなくなってしまったのですが、そんな私を心配して下さい、英語で丁寧な解説を作して下さいました。

そんなディスカッションを通して、フィンランドの物権変動法制 - 私の研究テーマです - が英米独仏とは異なる一つの先進的な立場を示していること、日本で議論されていることがすでに立法化されていることが分かりました。興味は尽きず、研究の必要性をますます強く感じました。

トゥルク大は学部の留学生も多いのですが、海外の研究者も多く来ています。知財分野や国際法分野、EU 法分野が多いようです。そうした海外の研究者とも交流が持てました。特にインド人とウクライナ人の研究者とは友達になり、互いの国のことを話し

合いました。いつも興味深い話題で一杯でした。

博士論文を執筆中の研究者とも交流することができました。大学の教育も担当しており、給料を得ながら研究していました。結婚している人も多く、子どもがいる人もいました。完成に10年ほどかかる人もいるようです。大学のスタッフとして働いていること等、日本の博士課程とはかなり制度が違うようでした。

## (3) イベント

法学部にとけ込めるよう大学のいろいろなイベントに誘って頂きました。6月(夏至)と12月(クリスマス)には法学部のパーティがありました。また、毎週木曜日にはフロアーボールというスポーツゲームが開催されていました。なんと九大法学部に夫婦で留学していたという教授がいて、その方に誘って頂いたのです。一時間走りっぱなしという非常にきつい内容だったのですが、楽しい競技だったし、親しく交流が持てる場として非常にいい機会をもらいました。



雪の日の法学部棟 2012年4月3日

## トゥルクの人々と日常生活

受け入れを担当してくれたスタッフ、住居の関係で知り合った人達とは、家族ぐるみでの付き合いとなりました。また、トゥルク在住の日本人とも親しく交流することができました。トゥルク大で働く食品科学関係者、ノキアの社員、公務員、日本から嫁いだ人達、交換留学生、そして和食レストランのオーナーなど、二十数名の人達が在住し、楽しいネットワークを作っていました。さらにそうしたネットワークを通して、日本ファンというフィンランド人

とも知り合うことができました。

ハイキングに誘ってもらったり食事に誘い合ったり、互いの家族のことを話し合ったりと、フィンランドでの生活を素晴らしいものにしてくれた出会いです。

フィンランドの日常生活で何より驚いたのは、残業がほとんど見られないことでした。通常、午後4時から5時には仕事終わり、家庭に帰ります。その後は家事、育児。子どもと公園に来ている父親の姿を本当によく見かけました。

それから子どもの保護も手厚かったです。躰として子どもを叩くことは厳禁。犯罪として通報されるそうです。このことは理念としてあるだけでなく、日常生活にも浸透していました。

EUの経済危機とかいろいろ大変な問題もあるけれど、社会福祉が国の軸にしっかり根付いている。そんな印象を強く受けました。

## 最後に

今回の留学は、一通のメールをトゥルク大に送ったところからはじまりました。事前に何のつながりもなく、紹介状もなかったにもかかわらず、快く留学を受け入れて下さったトゥルク大学の方々、特に学部長 Jukka Mähönen 先生、Mirikka Ruotsalainen さん、そして心温まるお人柄で指導して下さった Jarmo Tuomisto 先生には感謝の言葉がありません。そして今回、在外研究の機会を与えて下さり、支えて下さった本学の全関係者の方々には、私と家族に素晴らしい1年を与えて下さったことに深く御礼を申し上げます。

